

二次元ぷち文庫

破邪弓巫女

エグビ

筆祭競介

表紙イラスト：明地平

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『破邪弓巫女 ミヤビ』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



破邪弓巫女

ミヤビ

筆祭競介
表紙／明地雷

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

みやび 魅矢美

妖怪退治をしている神社の跡取り娘。処女しか使う事のできない破邪の弓を使って妖怪を退治している。

妖魔

学校にたまった性欲の気が実体化した触手のバケモノ。

夜。

満月の光に照らし出された校舎の中で、激しく動く影二つ。

一つは巫女装束を着た少女。左手に古風な木製の弓を持っている。

美しいアーモンド型の瞳と高く伸びた鼻梁。黒髪のショートヘアに凛々しい眉。シャープな頬に小さく尖った顎。凛々しく大人びた表情をしているが張り詰めた肌の若さから推測して、まだ十代後半の歳だろう。

白の上着と赤い袴というスタンダードな巫女装束に包まれている身体は、ほっそりしておりなかなかスレンダーだ。まるで宝塚の男役のようなハンサムな美貌とスマートなスタイルをしている。

しかしあくまで「男役」であり、男と見間違ふことはない。

月明かりに白く浮かび上がる肌の艶やかさや唇のまろみ、そして弓撃に支障のない程度に膨らんでいる胸元などなど。そんな部分的な特徴を挙げることもなく、彼女が全身から発散している艶やかな雰囲気かりやが雄弁にそれを物語っている。

少女の名前は狩夜魅矢美。この学校に通う女子学生であり狩夜神社の跡取り娘でもある。そして彼女が手にしている古風な弓こそ狩夜神社に代々伝わる破邪の弓だった。

破魔矢に代表されるように、直接手を触れずに遠くの獲物を仕留める弓矢というシステムは、古来より呪術的な意味あいあが強い。魅矢美の実家である狩夜神社も弓矢に特別な力

を宿らせ神事を行う神社の一つで、弓矢を使い悪霊を払う業を古来より受け継いでいた。

「グルグルルルッ……」

そしてもう一つの影は人外のバケモノだった。

蛇や蜥蜴ヒカゲのような細長い頭と鱗に覆われた全身。鋭い爪を有する手足に長い尻尾。

ファンタジー映画やゲームに出てくるリザードマンに酷似した外観をしている。

その蜥蜴妖魔は魅矢美に背中を向けて逃げていた。所々の鱗は削がれ青色の体液——妖魔の血が滴り落ちている。それまでの戦闘の結果、弓巫女の少女が妖魔を追い詰めていた。既に戦意を失い逃げ続けていた蜥蜴妖魔が目の前の教室に入っていく。

（よし。ここで仕留めるっ！）

弓巫女も蜥蜴妖魔の後に続いて教室に入った。

歳若い少女とはいえ魅矢美は歴戦の妖魔ハンターだ。豊富な実戦経験から敵を確実に追い詰めた手応えがある。

しかし彼女は弓を手にしているが矢を持っていなかった。だが——。

「これがトドメよ！」

巫女少女は左手で弓を前方に構え、箆手をつけた右手で弦を引き絞った。

動きに合わせてまるで手品のように右手が光の矢を暗闇の中から出現させる。箆手こてに描かれている幾何学的な紋様——封魔の印も同時に光り輝き闇夜の中に浮かび上がる。右肘

が限界まで後ろに伸ばされたときには、光の矢は実体があるがごとく輝いていた。

月明かりの下、巫女衣装をきた凛々しい少女が光の矢を引き絞っている。その光景はあまりに美しく幻想的で、その姿だけで邪悪な妖気を払えそうなほど威厳に満ちていた。

「破邪っ！」

魅矢美が鋭い言葉を発した直後、引き絞られた矢の先に光の円が現れた。一瞬で弓の長さと同じだけの径まで膨れ上がり、緩やかに回転し始める。

それはまさに空中に描かれた魔法陣——封魔の印だった。右手の籠手に浮かんでいる幾何学模様酷似したデザインである。この封魔の印を光の矢に刻みつけ、そのまま敵に撃ち込むことにより妖魔狩りは完了する。

（この一瞬が、一番気を張らなきゃいけないところっ！）

魅矢美の瞳が蜥蜴妖魔をジッと見つめる。あるいはその瞳の力強さこそ、もつとも退魔の力を宿していたかもしれない。

「撃っ！」

弓巫女の右手が開いた直後、実体のない光の矢が放たれた。

空中に描かれた封魔の印の中心を撃ち抜くと、光の矢の表面にその紋様が刻み込まれる。しかしそれも一瞬。

シュッパッッ！

まるで魅矢美の右手と妖魔の頭が一直線の光の糸で結ばれたようなスピードで、破邪矢が妖魔の眉間を撃ち抜いた。

（やったっ！ 抜群の手応え！）

数々の妖魔を払ってきた破邪巫女は、その実戦経験から今の一撃でほぼ仕事が終わったことを直感していた。

しかし表情が緩みそうになるのをグッと抑え、気持ちをしめるために一つ深呼吸。完全にトドメを刺す直前が危険なことも、数々の実戦経験から学んだことの一つだった。

左手に弓を構えたままゆっくりと妖魔に近づいていく。

窓から入ってくる月明かりの中、リザードマンのような姿だった蜥蜴妖魔がシューシューと湯気のようなモノを吹き出していた。その湯気が全身を覆っていた鱗が蒸発でもしているかのように人の形状に戻っていく。直撃した破邪矢の光量によって妖気が浄化されているようにも見える。

妖魔の本体——もとは人間だったようだ。その正体が動物や植物、あるいは道具の場合もある。人間の場合、正気に戻ると妖魔時の記憶を失っているので、そこで破邪巫女としての仕事は終りだ。

（完全に妖気を払えたかな？）

蹲うずくまっている半妖魔半人間の顔を確認するために、弓で妖魔の腕を開かせる。頭を抱える

ようにして蹲っていた人の顔が月明かりに照らされた。

それまで厳しい視線で敵を見つめていた少女の瞳が丸く見開かれる。

「た、田原先生!?」

驚いた。それは魅矢美の担任教師である田原先生その人だったからだ。

神経質な気性の物理教師で歳は四十代半ば。たしか結婚もしていて魅矢美たちと同年代の子供もいるハズだ。生真面目な性格で一見妖魔になりそうもない人物に見える。が、得てしてそういう人物こそ日々のストレスを内に溜め込み妖魔化しやすかった。

そこまでの知識はあったのだが、いざ知り合いとなると驚きを隠せない。理屈はわかっているても「あの田原先生が……」と啞然としてしまう。

それがまずかった。顔を確認するために唯一の武器である弓を無防備に差し出すような姿勢になっていたのも最悪だ。

バシッ!

それまで脅えきった表情をしていた半妖魔——田原が、教え子の動揺を見て取ると突然、片手で弓を薙ぎ払った。弓は教室の隅まで弾かれてしまう。

(し、しまったっ!)

そう思ったときには遅く、まだなんとか形状をとどめていた妖魔の尻尾が魅矢美の足首を薙ぎ払う。

ズカッ！

その場に倒された。床に両手をついた巫女少女は咄嗟に身をひるがえす。しかし妖魔の手が鋭く伸びて、後ろを向いた左足首に素早く絡みついた。

「くっ……」

反射的に掴まれていない右足で後ろ——妖魔教師を蹴りつけた。

ガシッ。

しかし手の平で簡単に足をキャッチされてしまう。

破邪の弓を手にしていない魅矢美はただの少女だった。幼少のころより古武術を学び、運動神経に優れているとはいっても所詮人間でしかない。妖魔に抵抗するだけの力はなかった。

「か〜り〜や〜っ」

粘りつくような声で妖魔——田原が授業中のように魅矢美の苗字をつぶやくと、両足を掴んだままズイッと身体を寄せてきた。教師の両手が生徒の足首から腰に移る。片手で腰を巻き込みながら空いた片手が赤い袴にかかった。

ピリリリリッ！

まるで紙でも破るように容易く袴が引き裂かれる。

月明かりの下、少女の下肢が晒された。

焦らしに焦らされ与えられた一撃に顎を大きく仰け反らせる。たっぷり時間をかけて限界まで高められたアナルの疼きが明確な快感へと変貌する。

魅矢美は白い喉を剥き出しにして喘ぎ続けた。

ぺちよん、ちゅくるる、ちゆるるるるっ。

蛇舌の動きは強烈だった。しかも粘度の高い唾液で生暖かくぬめっている。

想像以上の快感に、M字開脚するために自らの膝裏を掴んでいる両手には限界まで力が籠もり、白い足袋に包まれた指先をふくらはぎが痙攣するほど丸め込む。

（お尻の穴がふやけちゃうっつ！ お尻のあながあ溶かされちゃうっつ！）

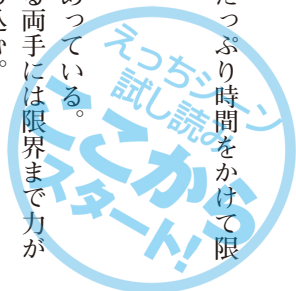
先端で二つに割れている舌先が丹念に肛門の皺一本一本の溝を舐めあげていく。本当に一本一本端から窄まりにいたるまでを、まるで皺を引き伸ばすように舐めていく。

その執拗さに担任教師のアナルに対する妄執を実感した。その直後――。
むちゅくくくっ。どるるるるるっ。

割れた舌先を振りあわせると、筋肉で固く閉じられた皺孔に突入を開始した。

「くはああっ！ あっああああああっ！ せ、先生のあつ舌があつ、入ってくふあつ、お尻の中にいつ、は、入ってくはあつっつっつ!!」

通常の人間の舌ならば、その太さや形状から僅かに舌先が肛門にめり込む程度だろう。しかし今、魅矢美の菊穴に襲いかかっているのは細くて長い爬虫類系の舌だった。アリク



イの舌が細い蟻の巣をほじり返すように、妖魔教師の蛇舌が生徒の排泄孔を貫き始める。異物の強引な侵入に、入り口を制御している括約筋が条件反射で引き絞られる。

無駄な抵抗だった。錐きりのように振りあわされた妖魔の舌の侵入を阻止することなど不可能なのだ。いくら強固な筋肉の収縮でもそこは元々穴が開いている部位である。無理矢理肉を貫く必要などない。ほんの僅かな隙間にちゅると尖った舌尖を差し込めば、あとはその隙間を大量の唾液を潤滑油として押し入ってくるだけだった。

（だめえっ感じちゃうっ！ お尻の穴を先生に——妖魔に舐められて感じちゃうっ！）担任教師が自分の肛門を舌で貫こうとしている驚愕や嫌悪感よりも、既に性感帯になり果てている排泄孔に舌が侵入してくる肉悦が上回った。ビチビチと蠢く舌の感触に目の前ではありもしない快感のスパークが瞬き続ける。何も見えない。感じられることは自分の肉穴を貫こうとしている舌の蠢きだけだった。

そして強烈に躍動しながら少女のアナルと激しいせめ闘めぎあいをしていた舌が、ちゅぷんっ！

引き絞られていた筋肉群を突破した。

「ふくはああああああああっっ！」

魅矢美は絶叫した。異物が自分の体内に侵入してきた感覚に両目が大きく見開かれる。痛くはない。しかし強烈な違和感が肛門を中心にして全身に迸る。そしてその違和感は、

舌を肛門に差し込んでいるといふのに明朗な声が響いた。

命令されるまま顎を引いて視線を自分の股間に向ける。視界が官能の涙でぼやけていた。
(ああっ、私のお尻が長い舌に……)

黒い貞操帯のその先で、桃色に染まった臀部の中心——魅矢美の肛門が妖魔教師の舌に貫かれていた。体中で蠢く二又の舌の動きがリアルに感じられる。まるで脳味噌の中に舌を差し込まれぐちゅぐちゅと掻きまわされているようだ。

破邪巫女の心身は肛姦の悦楽でドロドロに溶かされ始めていた。

顎を引いたまま舌の動きに合わせてあられもなく喘ぎ続ける少女を、妖魔教師がジッと見つめ続けている。女子生徒の肉体だけではなく、その快楽の表情や感情の最深部まで貪り尽くそうとしているようだ。

ちゅるるんっ！

突然、舌が肛門から引き抜かれた。

それまで発し続けていた官能の喘ぎが止まる。無意識に息んでいた全身から力が抜けてくたつと後頭部を床に落とした。はあはあと荒い呼吸を繰り返す。それに合わせて犯され続けていた肛門がくばあくばあと収縮する。

(なんか変……やっとお尻が解放されたのに……前よりムズムズするっ)

肛門舐めをされる前より肛門が疼いていた。

「どうした狩夜。物足りなさそうな顔をしているな」

凶星を指されても軽く下唇を噛むだけで、否定することはできなかった。

その羞恥の表情をじっくり観察してから、完全に蜥蜴妖魔の顔に変化した担任教師がパカリと口を開けた。教え子の尻に三度かぶりつく。牙は立てず、巨大な蜥蜴の口が少女の肛門を中心にした空間を密閉する。

くちゆるるっ！　じゅぷぷっ！　ぬくるるるるっ！

鞭のようにしなった舌が再度アナルを貫いた。

「はひいつっ！　そんなに激しくズボズボされたらあお尻の、穴っお尻っお尻が壊れちゃううううっつっつ！」

今度は先ほどまでのように入れっぱなしではない。

舌を限界まで突き入れては引き戻し、そして再度挿入してくる。

それはまさに舌と肛門の性交だった。ぐちゆるぐちゆると舌がアナルにめり込む音が魅矢美の耳にまで響いてくる。しかも――。

ずちぐちゆるるっ！

妖魔教師は息を吸っていた。密閉された口内の空気が吸いたてられて、今までとは比べものにならない舌との密着感が発生する。

「だめっ、ああっ！　すつたらあっお腹の中身があああっつ！　はひひいつ！　舌が、そ

常に凜々しくクールだった理性は肛門と同じように舐め溶かされて、自分のアナルから逆り続ける快感に塗り潰されている。肉と肉が深く交わる極彩色の官能が少女の体内で猛烈に渦巻いていた。

「たまんねえ。ケツの入り口はすげえ締めつけてくるのに、中はヌルヌルでホカホカしてやがる」

妖魔教師の胴体から、ろくろつくびぐのように首が伸び、目の前に蜥蜴の顔が現れた。鱗に覆われた唇のない口がパカリと開く。

「なっ……い、いったい何をっ——むぐうっ！」

口が塞がれた。生臭い口臭と同時に細い舌が口内に侵入してくる。

自分のアナルの最深部まで舐め尽くした舌と舌先が触れあう。

くちゅるるっ。ぬるるるっ。れろぬるるるっ。

二又に分かれた蛇舌が、魅矢美の舌を巻き込むように絡みついてくる。ぬるぬると舌全面を細い蛇舌が這いずりまわる。

気色悪いと感じる理性は残っていなかった。敏感な味覚器官を絡めあう痺れるような快感に、見開いていた瞳がトロンと蕩ける。

同時に蜥蜴妖魔の両手が魅矢美の上半身を弄り始めた。

下半身は女性器のみをガードする黒い貞操帯と足先を包む純白の足袋以外、全て剥ぎ取

られていたが、上半身はまだ巫女衣装を着たままである。

上着の衿を掻き開かれるとサラシを巻いた胸が現れた。スレンダーな体型に相應しい小振りな膨らみが白い布に包まれている。

（おっぱいまで……田原先生に……）

妖魔は鋭い爪であっさりサラシを引き裂くと、形の良い乳房を剥き出し弄び始める。固く尖った乳首に鱗で覆われた指が触れる度、ビリビリと鋭い快感が迸った。両手で胸を弄りながら、時折片手で少女の腰から引き締まった腹を撫でまわす。健康で尚且つしつかり鍛えている肉体でなければ維持できない腰のクビレに妖魔の指が這う。

二つの乳房の形からウエストの細さまで担任教師の指にじっくりと堪能される。しかしその淫猥な指の動きに嫌悪感を感じはしなかった。それどころか火照った少女の肉体はビクビクと官能の痙攣でそれに応えている。肛門に埋め込まれている男根までもびぐっびぐつと引き絞っていた。

「ふぐううっ——むぐっ……あふううっつ」

ねちっこいディープキスを続けながら担任教師の口内で魅矢美は喘ぎ続けた。

たっぷり少女の上半身を味わってから再び蜥蜴妖魔は身体を起こす。

両手で少女の太腿の付け根部分を掴むと尻を抱く姿勢になる。

「さすが狩夜はクラス一の優等生だな。もうケツマ○コに先生のチンポが馴染んでる」

動くぞ、と宣言し妖魔が腰を前後し始めた。

パンパンと切れのある音を響かせながら、固い鱗に覆われた下腹が少女の下半身に打ちつけられる。丸く引き締まった臀部が弾む。健康的に発達した尻の筋肉はビクビクと痙攣し、その上を覆っている牝脂が突入に合わせてタプタプと揺れる。肌理きりの細かい尻肌には、妖魔が刻みつけた歯型がクッキリと刻み込まれている。牝の性欲を掻き立てて、より一層腰の動きを促進させる淫猥な光景だった。何より四つん這いで交わるという獣の体位は、原始的な性欲を刺激するものがある。

「ひっひぎいっつ！ お尻があっあっつっ壊れるっ、こわれちゃううっつ！」

細い舌による出入りとは比較にならない、牝肉の質量とそれに伴なう圧倒的な摩擦感に絶叫した。自分のアナルが丸く拡張しているのがはつきりとわかる。

ばぶっ。びばぶっ。ばぶばぶぶっ。

肛門に根元まで埋まっていた男根が引かれる。熱くて太い肉棒がズルズルと排泄孔を擦っていく感覚は、快便時の爽快感そのものだった。そして腰を突き入れられる際のペニスを打ち込まれる摩擦感、凸肉と凹肉が嵌まりあう性交そのものの快感だ。

細い舌に貫かれただけで頭が真っ白になるほど感じてしまった魅矢美である。それが今では妖魔のペニスを深く埋め込まれている。耐えられるハズがない。敏感な若い肉体が感じるまま喘ぎ続けた。

「はへええっつ！ アナルのおくまれえズンズンするのおおっつ！ ああっケツマ○コのおくまですぶずぶつきいれてへええっつ！」

呂律の回らない口元から涎を垂れ流し、悦楽の涙を流しながら官能の赴くまま声を上げている。

恥も外聞もかなぐり捨てた教え子の表情を、首を伸ばした妖魔教師が真正面から見つめていた。肛門を激しく犯しながら、少女のあられもないアクメ顔をじっくり観察している。時折、流れる涙や涎を細い舌で舐めとりながら、口を塞いで再び舌を絡めあう。

（すごいきぼちいいっ！ おケツもお口もみんなきぼちいいっ!!）

破邪の巫女は口内に侵入してくる妖魔の蛇舌に、自ら舌を絡めるまで堕ちきっていた。

その反応に蜥蜴妖魔の動きが激しくなる。魅矢美のクビれた腰をガッチリ両手で握り締め、掲げられた尻を絶対に逃がさない形にすると、その丸みを破壊するように激しく下腹を叩きつけてくる。射精直前の人間の腰振りとは、蛇がうねるような独特のしなやかさが混じりあつた妖魔のラストスパートだ。

自分と同じく相手も昂りきつている実感に、破邪巫女の全身が官能の炎で燃え上がる。全ての感情が性の肉悦に塗り潰されて魅矢美は大きく仰け反った。

「いくふううっ！ ケツマ○コずぶずぶされていっっちゃううっつ！」

肛門と肉棒の密着している部分からバブッバブッと行き場を失った空気が漏れている。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>